

## 「我に返った彼」

(創世記37章2節～28節)

今週  
の  
みこ  
とば

「すると、ユダが兄弟たちに言った。『弟を殺し、その血を隠しても、何の得になるだろう。さあ、ヨセフをイシュマエル人に売ろう。われわれが手をかけてはいけない。あいつは、われわれの弟、われわれの肉親なのだから。』兄弟たちは彼の言うことを聞き入れた。」(37:26, 27)

(ルカの福音書15章1節～32節)

「しかし、彼は我に返って言った。『父のところには、パンのあり余っている雇い人が、なんと大勢いることか。それなのに、私はここで飢え死にしようとしている。』」(15:17)

## 今日のメッセージ要旨

◎私たちはともすれば1つのことに没頭しているとそれにのめり込んでしまい、我を忘れる場合があります。しかし、ふっと我に返る瞬間が大切なのです。

◎創世記37章～50章は「ヤコブの生涯」の記事で、その中に「ヨセフの生涯」が含まれる。①家族の中でのヨセフ、②ヨセフの夢、③ヨセフ、エジプトに売られる。ヤコブは母から寵愛された。それが父に愛されたエサウとの対立を生み、家を出なければならなくなった。また兄との和解まで長い時間と神の厳しいお取り扱いが必要ともなった。そういう経験をしてきたはずなのに、ヤコブは自分が父となると、ヨセフが愛妻ラケルの子であり年寄り子であったので、ヨセフを愛し特別扱いしていた。そのためヨセフは兄たちの憎しみを買い、命を奪われそうになるが、長兄たちの執り成しで何とか命は守られ「ミデアン人の商人たち」に売られる。その後エジプトに連れて行かれ、王(パロ)に仕える侍従長に奴隷として買い取られたのです(28, 36)。

ヨセフは父と兄たちが自分を伏し拝む夢を見た。自分の心に秘めておけば良いのに、愚かにも兄たちに話し恨みを買った(5-11)。それがエジプト行きという苦難を生むのです。ところがヨセフがエジプトに下ったお蔭でこの夢が実現するのです。彼を恨み妬み、殺そうと図った兄たちは(20)、今のヨセフしか見ず、これから神さまがなそうとしておられることがどんなことかと考えなかったのです。しかし、神さまのご計画と導きは人知を超えて深いのです。

◎ルカの福音書15章には、①99匹を残して迷子になった1匹の羊を探しに出かける羊飼いの話(3-7)、②10枚の銀貨をなくし必死で探す女性の話(8-10)、③父の生前に財産の分け前をもらって旅に出、それを使い果たして帰ってきた弟息子を暖かく迎えた父親の話(11-32)。3つのたとえ話に共通しているのは、失ったものを見いだした喜びである。

当時の人々で人間のくずのように考えられていた「取税人たちや罪人たち」がイエス様のもとに集まるのを、パリサイ人や律法学者たちは心良く思わないばかりか、汚らわしいと感じていた。そんな人たちに、イエス様は、考え違いを直すために、この3つのたとえ話をされた。

◎弟息子は父に生前贈与を要求し、受け取った財産を持って遠国に行き、放蕩三昧した結果、飢饉のためユダヤ人が忌み嫌う豚の世話をし、食べるにも窮する羽目に陥り、目覚めて父の許に帰る決心をしたのです。父は変わり果てた姿の息子を認めて走り迎え早速宴会を開いたのでした。それに対して兄は憤慨するのですが、父は二人を息子として受け留め、語りかけるのです。

父は神様の姿を示し、弟息子は私たち人間の姿を現しております。神様はご自身から離れている者に、ご自分の許に早く立ち返ることを願っておられるのです。私たちも、いつも悔い改めて神さまの許に立ち返ろうではありませんか。